

十一月一日

さすがに心配なり。昨日一回、今日二回文部省へ行く。二回目に福岡のS君と和歌山縣の某君と合し、筆記は全部合格の旨を知る。

踴躍して宿に歸り、理髪、入浴、筆記帖を繰り、口頭問題を假設して答辯の練習をなす。前祝に三吉野の餅を食ふ。」

十一月二日 快晴

日本晴、昨夜は頗る快眠、爲に頭腦清澄、快極りなし。七時半宿を出で、文部省修文館へ行く。くちをひけば余は二番なり。やゝありて一番と共によばれる。

第二室、井上哲次郎博士と吉田静致學士、思ひの外容易なり。井上博士は型の如くミユアヘッドの動機説なり。同博士が、神社をシンシャと言はれるのが解らぬで困りたり。第一室、中島力造博士と服部宇之吉博士、この方は前の室より悪し。殊に服部博士の朱子の理と心と性との關係の如き

は、全くしどろもどろの返答なり。

しかし何れの室も他の人より早く終れるが嬉し。直ちに日比谷圖書館に行き、夕方再び修文館に行、電燈の下に全部の口述の終るを待つ。

午後八時、係員が現れて「今からお名前を呼ぶ人だけ残つて、其の外は全部お歸り下さい。」といふ。「名前を呼ばれたのが合格か、呼ばれざるが合格か。」と訊ぬれば、呼ばれざるが合格と考へてよしといふ。廿名何れも極度に緊張す。聽て三四名の名が呼ばれたるが、予の名は終に呼ばれず。思はずハツと吐息す。

嬉し。嬉し。吾は文檢に合格せるよ。あゝ吾々は茲に目的を達したるよ。月皓々、風颯々、柳よ、電燈よ、吾は終に勝てるなり。

大阪府のI君と、教科の参考書を談じつゝ歸る。

十一月三日 晴

かけまくも長き立太子式の當日なり。二重橋外は人の波にて押し分け難き程なり。陽光燦として

天にあり。瑞氣溢れて地にあり。而して吾又勝ちて此光榮の日に逢ふ。
今朝、郷里へ電報をうち、人波を分けて内幸町へ行き、弟に合格を知らす。それより、神田の古本屋を廻つて、教科の古本をあさる。歸郷の支度を終りて少眠。午後十時すぎに弟に送られて上野驛より車上の人となる。

十一月八日 快晴

合格の賀状しごりに来る。且新聞にも僕の合格が発表になつた。

今夜より第一號よりの文検世界を参考として、教科の豫定計畫を樹てることとする。

十二月一日 快晴

論理學大半終る。中々面白し。今夜「雄辯」の風雲兒號を読む。興湧き遂に勉強をせず。

吾が將來は教育家のみ。眞の教育家、最大の教育家となるにあるのみ。目標はたゞそれ一つ。

これに到達する方便は、たゞ一の努力あるのみ。最善の方策の下に最善の努力をなすにあるのみ。

み。

最近三ヶ年の具體的計畫を次の如く定む。

廿七歳 文検教科をとる。研究。

廿八歳 師範の附屬に入り、活動、研究。

廿九歳 結婚。

大正六年以後の日記より

大正六年以後の日記は、全く要項のみを記した簡單なものにしてしまった。たゞ、所々に感想を書いたものが入つてゐるのみである。よつて、これ以後は、その感想と言はうか、自誓の言葉と言はうか、その少しを摘録することにする。

簡単にその後の経過を言ふと、廿七歳にしてN市の小學校に出で、その年教科合格、その翌年國語漢文科合格、それから一二年は目的に迷ひ、終に目標を國語科高等教員檢定に定めて三年ばかりで合格した。そ

して其の間に結婚し、學校も二三轉じた。

八月十七日（六年）

受験して歸省後閑々の日のみを送る。嗚呼われ小失戀家となりて、輾轉反側の徒となれること幾夜ぞ、今日三里の道を歩みてSの温泉に来る。高原には已に秋色溢れて心地よき三里なりき。峡谷に臨める湯の宿に宿し、階上の窓を開く。溪聲直ちに階下にあり。峯盤直ちに眉上にあり。秋氣ここにも澄みて、傷魂すゞろに寒きを覺ゆ。

夕暮、友二人來りて同宿す。共に飲み共に唄ふ。ラツパ節、追分節、磯節、詩吟、何でも滅茶苦茶に唄ふ。宿の女中も來りて唄ふ。われはこの野趣野情を愛す。

湯は男女混浴なり。これも中々趣味あるものなり。然れども村の女の厚顔なるには、吾等少しく面喰ふ。

深更、われひとり窓に凭りて默思す。わが前途如何。人生とは如何。世頼むべからず、人頼むべからず、たゞわれを頼むべきのみ、戀も泡沫、名も泡沫、たゞ永遠の生命あるもの、そはわが心の

「まこと」のみ「まこと」に生きよ。純く純く「まこと」に生きよ。成敗もとより眼中にあらず、毀譽もとより眼中にあらず、たゞ黙して歩め。

あはれ、傷める心に故郷の山川あまりに悲し、われは灯あかるき都會を戀ふ。灯あかき都會よ、新秋の都會よ、われはそこに血みどろに戦はむ。然り、血みどろに戦はむ。

峡谷の窓外たゞ黑暗々、水聲牙えわたりて夜は愈々深し。われはたゞ一人その聲をきく。

男の子とは酒のみて歌をうたふものたゞそれだけぞ飲め飲めうたへ。

酒のます歌うたはずば若きいのち恐らく泣かむ飲め飲めうたへ。

若ければ女中も歌ふ友も歌ふ歌へ若き日いくつかあらむ。

歌やめば瀾の音きこえうらがなし歌ひつゞけむこのよもすがら

六月二十日（七年）

田舎は産業期だと見えて、地方の教員が多く參觀に来る。熱心さは敬服だがうるさくて耐らないことだ。

將來を如何せん。これ程余の此の頃を憫ますものはあらず。予は他の人の如く、小學校校長を以て終らんとする程の悟りを有せず。然らば中等教員か。中等教員も、平凡の教員にては小學校教員よりも一層つまらなきなり。あゝ然らば予が前途如何。予は教育界の犠牲者として歩み出でしものなり。日本の實際教育の革命者たらんとして、軍隊除隊後の生を歩み出でしものなり。予は此の目的を捨てたるか。予はこれを捨てたるに非ず。たゞ周邊の情勢漸くこれを不可能となすものに似たり。

予が今とるべき道は大體三つあり。

一は小學教育に携はり、予が素志を貫徹するにあり。

二は中等教員として成功することなり。

三は中等教員となりて或る種の研究を目ざし、將來に於て一個の學者とならんとするものなり。予のとるべきは其の中の何れぞ。

第一の道は本質的に予に適せざるなり。予は極めて臆病者にして、一人の參觀者ありても思ふが儘の教授が出来ず、一人の外來者に對しても満足なる應對をなす能はざるなり。至誠はありと雖も

予の如き非實務的のものが、此の方面に於て爲すあらんとするは、甚だ困難なることなり。

次に、正直に言へば、小學校教員の収入にては、新たなる余の生活に不足なるなり。余はもとより贅澤を好まず。然りと雖も、一冊の新刊書も買はれず、一幕の劇も観る能はざるやうにては、文人として、生き居る甲斐がなきなり。茲に於て、余は先づ第一の道を捨つるの止むを得ざるを思ふ。

第二の道も、第一の道と五十歩百歩なり。中等教員として、教頭に校長に進出せんには、一かども一かども世才と厚顔と勇氣とを要す。然るに、余には先天的にそれらのものが缺乏せり。故に、第二の道も余の採るべき道にはあらざるが如し。

然らば、余の進むべき道は第三の道か。一個の學究として、小さくとも專念に二つの穴を掘り行く人となるべきか。あゝさるにても、余の目標の、何ぞ漸々として小さく萎び來れる。

十二月三十日（七年）

大正七年は終らむとす。

天地は黙々として残り少き公轉の道を歩み、N市の夜は沈々として雪に冴え、余亦黙々として机に對す。

沈思すれば、今夜、余は人生の一大轉機に立てるなり。過去の如何なる歳晩にも見る能はざりし種々の意味を有する身として、逝く年を送るの人となりしなり。

夜は更けたり。いでいで、余は今余が胸中に湧き来るすべての感懐を吐露して、一は以て過去を反省し、一は以て將來を慮るの料となさんとす。

先づ余をして來し方を顧みしめよ。余が半生は比較的余にとりては感謝すべきものなりき。小學校教員としての資格を最高までとり得たりき。中等教員としての資格も三科までとり得たりき。而して國民の義務たる兵役をも完全に履行したりき。殊に、余は、半生の最終の年たる本年に對し、その意義ある年なりしことを感謝せずんばあるべからず。余は此の年に於て、人生の最大事業たる結婚を、比較的満足の結果を以て完うし、更に短日月の間に文檢の一科を通過し得たり。

余は生れて不敏なりき。學才渙發の士と同日に論ぜらるべき資にあらず。余は又貧家に生れたりき。而して又極めて意氣地なく生ひ立ちたりき。しかも、顧みて余の過去はさまで悔ゆべく恥づべ

き過去にあらざりき。故に余は余の過去に對して深き感謝の意を表す。然り、余は誰人に見しめても、將來望みあるが如く見ゆる過去を有する也。故に余は、今夜前半生を終るの時に於て、茲に涙ぐましき感謝をわが過去の前に捧ぐ。

然らば余の將來は如何。

余は余の力を信ず。而して大なる理想を實現せんとす。余は家庭教育及青年教育の研究にその一生を捧げ、以て我國文化の上に幾干なりとも寄與するところあらむとす。而して此の理想を達すべき道程としては、次づ中等學校に出で、中等教員となるべし。次に此の中等教員を生活上の立脚地として、外國語・生理・醫學・心理學の研究をなすにあり。而して一方に於ては、着々として家庭教育の研究を進むるにあり。

余は如何なる理由によりて目標をこゝに定めたるか。教育の事業が國家將來の爲に最も重要なものは改めて言ふの要なし。而して、我が國の教育も漸く進歩し來りたりと雖も、其の進歩したりといふは僅かに學校教育のみ。教育の總根柢となるべき家庭教育に至つては單に在來の習慣と偶然の注意とによりて半ば盲目的に行はるゝに止まり、未だ一の科學的研究なく、一の組織的實施なし。而し

て、學者は何れも直接にパンの資料となるべき方面の研究のみに満足して此の方面に手を染めんとせず。かくて夙に開拓せらるべくして未だ開拓せられざる家庭教育の曠野は、荊叢徒らに茫々として荒れ行かんとす。余が揮つて家庭教育の研究に志したる理由は正にこゝにあり。而して余は斷じて此の方面に於ける最高權威となり、國家百年の爲に盡す所あらんとす。

余が理想は至高にして道は至難なり。之を行き之に達せんとする余には正に絶大の覺悟を要す。今余の守るべき條項を記すれば左の如し。

一、生活

イ、精神生活 一 健闘の意志

二 自然の恩寵人生理想に對する感激

三 聰敏なる知力と穩健なる常識

ロ、實際生活 一 衣食住

身體に最高の注意を拂ふ

なるべく質素なれ注文少かるべし

二 時間

一秒を無駄にするな

先づ爲せ其の時に爲せ

豫定なき一秒も送るな

二 修養

イ、消極的方面 一 名譽心を離るべし

ロ、積極的方面 一 自らいやと思ふことを必ずなせ

二 趣味と知見とを廣くせよ

三 勉強

一 時間を一秒にても多く生め

二 目的の爲に金ををしむ勿れ

三 豫定計畫の忠實なる實行者となれ

四 先づ爲せ
五 最善の法をとれ

四 身體

一 規律的生活

二、毎日朝夕の運動其他

三 飲食・住・衣の注意

五月二十九日（八年）

- すべてを解決せん爲に余は茲に死戦せざるべからず。
- 余のすべては、余の努力に依てのみ解決せらる。
- 父を離れ母を離れ家を離れて、余は何しに此の地に來れる。
- 父いまさば、母いまさば、何ぞ此の悔りも受けむ。
- 恨みも、悲しみも、愛も、孝も、すべては吾が努力に須つ。
- 余は石に嚙りつきても、戦はざるべからず。

- 時、初夏に入る。白雲も、青葉も、吾と共に進む。
- 「これを見よ」かく言ひて余の示し得るものは余の成功のみ。財産無し。地位無し。
-
- 余は神のみまへに余のすべてを捧ぐ。純真なれ。絶対に歸依せよ。
- 余の最後の味方は獨り余なり。次には父母なり。妻なり。兄弟なり。而して余の最終の擁護者は獨り神なり。
- 神のみ前にわがすべてを捧ぐ。わが戦に幸に勝あらしめ給へ。
- 余は今、黙禱す。
-
- 物質より外に何物も無きもの世に有り。よき衣服を着、よきものを食ひ、よき家に住めばえらしと思ふ。哀れむべきかな彼等。
- よき土産物を貰へば相手を大切にするなり。而して、何にかへ難き「まごころ」の贈物に對しては唾をはかんとす。

○ 世は腐敗せり。都會の人は腐敗せり。あゝ田舎戀し。田舎の人戀し。われ田舎に在らば、立派なる男にて有りけるものを。

○ 「十年の後を見よ」余は冷やかにかく言ふ。然り十年の後を見よ。

○ 一山百文の徒輩よ。笑ふも嘲るも汝等の勝手なり。余は余を信じ、余の前途を信ず。故に彼等が余を笑ふとひとしく、余も亦彼等を笑ふ。

八月二十八日（八年）

貸家を捜すこと三日、一軒も見當らず。住むに家無き國、家はあれど心地よく住む家なき國、何といふ慘憺な國だらう。

滋養物を食つて、本を自由に買つて、閑靜なよい室に勉強する人と、まづい物を食つて、本は一冊も買はれず、そして騒々しい室の一隅に小さくちよこまつて勉強する人と、この兩個の人の競争を、心ある人は何と見るだらう。あまりにハンデキャップが大きすぎる。金が無くてはうまく勉強も出来ない世である。

よい二階の一室が欲しい。そこに凡ての紛々を忘れて快き讀書三昧に入りたい。今のところは其の慾ばかりだ。

十月二十日（八年）

（日記の片はしに書ける）

米が高く、着物が高く、

俸給が少く、手當が少く、

校長はばかにて、教頭はまぬけなり。

かういふ話をなしつゝ來れば、

チラリハラリ 葉が落ちる。

本は買ひたし。雑誌も買ひたし。

たまには妻に半襟でも買つてやりたし。

こんなことを思ひながら歩いて来れば、

チラリ ハラリ 葉が落ちる。

男、二十八

皺くちやの服、かゝとの崩れた靴、

日にやけた帽子、

こんな恰好して毎日通る此の道に、

今日もまた

チラリ ハラリ 葉が落ちる。

十二月二十四日（八年）

十七日附で〇〇圓に増俸した。聊か嬉しい。優遇だとか待遇改善だとか言つて、労働者のやうに騒ぐやうな馬鹿な真似をせずと、自分で苦しんで自分で俸給を上げさせればいいぢやないか。一ケ

月一冊の雑誌もろくに讀まず、無駄話や碁や將某ばかりしてゐて、如何に世間がだまつてゐればとて、俸給を上げろ、手當を上げろとは、少しく蟲が好すぎるでは無いか。

S君如何。君等がテニスだとか釣だとか言つて遊んでゐた時、俺はどうしてゐたか。それを考へずに、増俸の點ばかり考へて白い眼をむくとは何と淺はかなことか。

一月廿七日（九年）

わが前送を如何、こは余が少年の頃より余の頭腦を去らざるものなりき。しかも今日此頃程、強く余を苦しめしことは、未だ會て有らざりき。余は年末年首の幾日を、此の問題のために費しぬ。しかも何等得る所無かりき。教育か研究か、社會的か學究的か、曰く何、曰く何、求めて得ざる余は、茫々幾日を懊惱と悶思との間に過せりき。

一夜、妻と此の問題を語りぬ、而して、余は妻の固き決意によつて、自らの不斷因循なる心に鞭うちて、大體次の如く定めぬ。

一、本年此の地にゐること。而して英語の研究に全力を捧げつゝ、徐ろに上京の手づるを見出すこ

と。而して目標は帝大選科か、又は他の研究方法か。而して、最後の目標をば研究におくこと。其の研究は國語科か教育科のうちなるべきこと。

二、これが爲、余は本年の仕事として次の如く定む。

英語は本年中にナショナルリーダー四まで終ること。八月には上京して手づるを求めること。

五月二日（九年）

昨夜盗汗。今朝海まで行つて来る。島村抱月氏の近代文藝の研究を読む。沙翁の墓を訪ふ記など大なる興味を以て讀んだ。何だか冷やか過ぎる文學者と思つてゐた抱月氏が、最もなづかしい人であるとは今迄思つてゐなかつた。

五時がなる。

おゝ幾萬年後の今頃も

やつぱり五時がなるだらうか。

其の五時がなる時

此の庭のボブラの葉が

やつぱりこんなに動いてゐるだらうか。

一月三日（十年）

俺は又目的が變つた。猫の目のやうに變る目的、俺といふ人間も全く情けない。

選科入學は實に多くの冒險を含む。俺は如何なる苦辛をも壓はぬ。しかし今に及んで老父母を心配させ、妻子を飢に泣かせることはどうしても忍びない。俺は斷然と選科入學の希望を捨てる。

しかし、俺の中心目的は一步も動かぬ。大學を出ずに俺の目的がどの邊までやり遂げ得るか疑問であるが、とに角俺はやる。倒れるまでやる。自分の最も價值ありと信ずる目的のために、世に埋もれ、友に後れ、周圍に嘲られても、俺は顧みて少しも悲しくない。

俺は學校の學友會雜誌に、精進即法悦といふ稚い文を書いた。文は稚いけれど、これは今の俺の涙ぐましい信念の表出である。成果をのみ見るな、過程を見よ。天下一人の余を知るもの有らば、此の過程の價值に、或は男の子の共鳴を寄せて呉れるかも知れぬ。

郷里の家に色々な問題がある。しかし、俺はあまりそれに頭を痛めるな。俺はイゴイストでは有りたくない。父を思ふ。母を思ふ。弟妹を思ふ。家を思ふ。しかし、俺が此のまゝ朽ちることが、果してこれらの人々の利益となるか。

俺は進む。涙をはらひつゝ、下を向いて進む。天下の萬衆が笑つても馬鹿にしても俺は進む。うちの人々が信じてくれる。妻が信じてくれる。天下後世、一人位俺の心に同情してくれる人もあるかも知れぬ。

俺は、選科をよすといふ點で、もう第一妥協をしたのだ。妥協に次ぐに妥協を以てし、凡化に次ぐに凡化するのだ。

上を見るな。横を見るな。妻や子に對しても涙を吞んで妥協するな。知るは天地の神のみ、俺は唯だ一人此の道を進む。

器械の如く。

八月十一日(十年)

なまけものよ。

お前の五時間の仕事は、全力を出す人には一時間で出来る。

月清し、なまけものよ、あゝ何か大きな力で、心の歪むほどどやしつけられたい。

十二月廿七日(十年)

三十が来る。何といふ淋しい年齢だ。人生の味ふべきもの、すべて味ひ盡して、人生とは大凡こんなものかと、女郎屋の朝の様な淋しさを感ずる、ほんとにいやな淋しい年齢だ。

しかし、こゝまで来なくては本當の人生は見えない。こゝ迄来て、人生の淋しさにしつかりと面接して、然る後確かりと歩き出す時、本當の人間らしい足どり、始めてそこに見出されるのだ。いやな年ではあるが、昔から偉い人の眞の偉さを發揮した年だ。

三月八日(十一年)

全力の人となれ。専念の人となれ。俺の生活は餘りに煩瑣に流れすぎた。必要以外のことをやる

のは、明かに神に對して罪を犯すことだ。もつとすべてを簡易にせよ。心のうちも生活も。そしてたゞまつすぐに進め。

俺のそばに、學校へまるで勉強に來た氣になつてゐる先生がゐる。作文を少しも調べず、二百人のを十五分位で點をつけてしまふのだ。俺の公憤といふものがもく／＼と頭を擡げる。しかし、俺を顧みよ。章魚のやうに八方へ手を出して、その手のもつれに苦しんでゐる俺を顧みよ。隣の先生がよいのか、俺がよいのか。

英語が何だ。中學校の生徒でさへ四五年でものにするではないか。それ位のことが出來ぬで、俺の前途のあの大きな仕事をどうする。困難なのではない。意氣が無くなつたのだ。

七月六日（十二年）

いつになつても梅雨の上らない年だ。和子も風をひいたらしく、咳ばかりしてゐる。俺も何だか風氣のやうだ。

轉任のどさくさで、さわがしい幾十日を過ぎた。漸く窓ごしに見る海に、夏の蒼さが盛り上つて

來た。そろりと勉強に親しめるやうになつて來た。

誰の一生が、「生れたからやむを得ず生きる」といふ一生でないものが有らう。運命の惡戯か、運命の偶然かによつて人は五十年の苦しい道を歩ませられるのだ。理想とか希望とかいふのは、要する所、人間の苦しさをまぎらす爲の言葉に過ぎぬで有らう。俺は、新しい土地で生活を始めた自分を見出す度毎に、かう思ふやうになつて來た。

窓から見ると廣い草原がある。そしてその草原の向ふに海が見える。俺はその草原を見るのが好きだ。雨の日など、しめつた光の中に、此の草原を見るのは何より好きだ。夕方になると、草原の向ふへ日が落ちる。草原の上に、紅や橙やの夕やけ雲が動く。

未來派の主張は、よいのか悪いのか知らない。しかし、自分で物を考へて行くとき、少くとも自分の中心的の仕事考へて行く時、未來派の如く考へるがよい。一切の過去から放たれる。そして本當に人間の未だ踏まなかつた道をふめ。

俺はどうしても人の上に立つて、面倒な仕事をして行くことは出來ない。俺は靜かな學究生活か詩人的生活をしたい。成るべく大きな學校へ行つて、成るべく責任の無い俗務の少い地位に身を置

きたい。

漱石よりも藤村が好きだ。あのしんみりした眞面目な所がよい。藤村の小説は小説のすき間すき間に、詩がふるへてゐる。藤村全集を買はなかつたことを遺憾に思ふ。

義弟と義兄が一日ちがひに來た。俺の心はその前に妙に親しまないのが悲しい。さう言へば、ほんとの弟や妹にだつて、膝を交へて二十分とはられない變な心の持主だ。俺はそれを思ふと淋しくなる。冗談を言はずに、眞面目になると、直ぐにいぢけてすくむ俺の心は、何といふいやな心だらう。

八月三十日(十二年)

八月も終る。休暇も終る。夏も終る。そして秋が來るのだ。

物悲しい。心細い。しかし、どこか、一つうんとやらうと言ふ氣も起きる。うんと讀書したいといふ氣も起きる。

ブラウニングの詩に、人の心を高めるものは、今爲す所のものでは無くて、爲さんとする所のも

のだといふのがある。過去の仕事、それは如何に大きいといつても、それには限がある。又將來の仕事も、自分の實際になす事は、小さなつまらないものに相違ない。しかし、人間には爲さんと描き得る能力がある。高く、大きく、深く、美しく、描き得る能力がある。それが其の人を無限に高め深めるのだ。眞剣で描いたものなら、どんなものでもよい。それに向つてまつすぐに進め。

心の枯渴したものは好んで講談を読む。俺は講談はきらひだ。しかし、俺のやうに雑誌のみ好きなのも困つたものだ。

來年には、きつと高等教員検定が有ると思ふ。其の機を逸したら又二三年機會は來ないのだ。俺は全力をあげて來年につつからう。

秋だ。地髓まで冷やかかさの徹る秋だ。俺は今日、萬全を期した豫定表を作る。そして、此の秋にうんと一つがんばる。

十二月十日(十二年)

武者小路實篤の書いたものの中に次の語あり。紙に書き壁に貼り付く。吾が心その前に肅然と

襟を正す。

我れ天にとどかずとも

天を目ざさむ。

八月一日（十三年）

小諸あたりで明けた。英語の講習は失敗に終つたが、かうしてその序に歸省できるのは嬉しい。信濃路の旅をしないこと、もう五六年になる。なつかしい街道だ。

家では、父母が燻ばたで小晝飯のところであつた。大いに驚かれた。うどんを煮てもらつたり、お風呂をたててもらつたり、夜は一時頃まで話した。

がらんとした、古いすすだらけの大きな家、自分達の生れ、育ち、遊び、泣いた家。今は子供はみんな散つて、六十に餘る父母のみが淋しく家を守つてゐる。

「俺らが一番運がわるい。一生難儀するがんだ。」
とも母は言つた。

「和子や正樹が大きくなるまで生きて居られるだろうか。本當に死ぬなんていやだ。」
とも言つた。

「何處へ行つたつて働かなくちやならねえんだ。いくら難儀したつて、それが子供のためになると思へば何でも無い。」

父は言つた。

枕についても中々眠られなかつた。

八月十八日（十三年）

和子も感冒、余も感冒、正樹もあをい顔してゐる。かうみんな弱くては困る。

一、子供は、小中學にては、勉強など念頭に置かずに身體を練らしむ。

二、子供の配偶者は、身體の強健を第一條件とす。

三、健康第一を家の方針とす。

十二月二十五日（十三年）

來るべき年の箴として、次の詩とも何ともつかぬものを書いて貼る。

すべての人を愛せよ。

心清かれ。

己が事業をなしとげむ。

のびやかに、明るく、あたゝかくあれ。

されど吾、人の心によりて生くるを恥とす。

わが心、かく生れ出でたる上は、天地間の一存在となれる上は

何者も左右すべからざるわが心なり。尊嚴なる事實なり。

誰の意により、誰の心によりて動くの要あらむ。

吾、願はくは、わが心のまゝに生きむ。

われ再び若からば

若き日の手記や日記を整理しつつ感じた、感謝・悔恨・回憶等の數々の中から、おほよそ「われ再び若からば、いかに生きんとするか」を中心としたとりぐの斷想を集めて見ました。

肅學問題で大學を去つた河合博士が、學生に最後の言葉として述べようとされたことは、「この世で最も價値あることは何であるかを考へ、それに向つて、命もいらす名もいらすといふ様な努力をしてほしい」といふことであつた。この言葉は鋭い針の如く私の心を刺した。

第一等のことをどこまでも尋ね求めなかつたこと、及び、それに向つての努力を徹底しなかつたことが、今の私を何よりも悔恨せしめてゐたからである。人生は二度無い。第一等のことをどこまでも追求しない人には、必ず悔いる日が来るのだ。自分の手で自分の一生を、第二等第三等のものとしたことに、誰が悔を感じないでゐられよう。

□

周圍に負けないことを以て主義として來た私、「ばか」と言はれることに飽くまで平氣で押通して來た私も、今にして顧みれば、やはり周圍に敗けてゐたのであつた。なぜなれば、結局に於て自分の境遇に妥協して來てゐるからである。なぜあの時、思ひ切つて大學に進まなかつたか、なぜあの時、思ひ切つてあの研究に突き進まなかつたか、この悔恨は深い創となつて、常に心にうづいてゐる。偉大なる人は、必ず境遇からの羈絆を、一刀兩斷に切り拂つて、いとも勇敢に、身輕に、最高の

目的に進んでゐる。自分にはそれが出來なかつたのだ。私は深い怨みを、若い日に向つて放たずには居られない。

□

「自分をえらいものにするのも、つまらないものにするのも、天分ではなくて、自分の手だ」人は、しみじみさう覺つた頃に、心ぼそい初老に入り、鬢に白髪をたくはへるのだ。

□

第一等のことを求めるといふのは、一生の目的を定めるときか、又は五年か十年かに一度來るといふ様なことではない。平常の一分一秒の間にも、その心構へが必要なのだ。本を一頁讀むにも第一等の眼のつけ方がある。ラヂオを一寸聞くにも第一等のきゝ方がある。

その場限りの、功利的な、世間的な、野卑な、下劣な態度から、常に超然と抜けはなれ、卓然と高く立て。

□

努力はよい。しかしその量のみを重視して質を輕んじるものが殆どすべてではないか。努力の質

には一から千萬までの段階がある。つまりぬ努力をいかに多く積んでも、その価値は零にひとしいであらう。

検定學徒は直接の指導者を缺く。高い人格的香氣に觸れることが少ない。故にいつしか、努力は量的にのみ注意され、質的に下劣なものになつてゆく。願はくは吾々の努力をして、麒麟の一步であらしめよ。馬車馬の千歩ではありたくない。

□ 「ウキークフヒールドの牧師」の中に次の様な一節がある。

全財産を預け入れてあつた銀行が破産したので、牧師一家は住みなれた邸宅にも居られなくなり、長男は新しい運命を開拓すべく、先づロンドンへ旅だつこととなつた。いよ／＼悲しい別れの日が來た時、父牧師は長男の前途を祝し、舊約聖書の次の一句を贈つたのであつた。

予は若かりき。今はかく老ひぬ。されど、この長き生涯に於て、正しき人とその子孫とが、窮乏に陥れる例を、未だ曾て聞かざるなり。

私はこの一句を若き検定學徒に贈りたい。何となれば、若き日の私は、余りに物質的窮乏を恐れ過

ぎた。その餘り、却つて物質的窮乏の周邊をのみ堂々めぐりしてゐる。神は常にみたまふ。常にきゝ給ふ。よしと信ずることを堂々と恐れず行つた者にも、眞の幸福は與へられる。

□ 眞の學徒としての態度に缺けてゐたことが今にして悔いられる。私のそれは、眞に清純熱烈なる學徒としての態度ではなくて、餘りに多く受験者的であり過ぎた。早く合格したい、彼の男に勝ちたい、きういふ妄念が、私をして、必要なものから力を抜き、不必要なものに力を徒費せしめた。産婆試験や運轉手の試験ではない。文檢は清純なる學術の試験である。然るに私のそれは、産婆や運轉手の態度に近い淺ましいものであつた。その爲に私はどれ程多くの損失をしてゐるか分らない。

□ われをして再び若からしめば、私は純眞なる清高なる學徒としてのみひた進まう。

□ 常に口笛を吹く心持で仕事にむかふ人と、常に決闘をする心持で仕事にむかふ人とある。眞剣な態度はよい。併し、何か殺されでもする人の様に固くなる必要は更々ない。朗かな心で仕事をする

といふことは、生理的にもどれほど有利なことか知れないのである。

□

西田哲學によると、人間の本質は「創造」にあるといふことである。常に新しきものを造りつゝ無限際に向つて進む、それが人間の本体である。してみると、人間は本質的に無限の冒険をして行くことになる。何となれば、一寸先も分らぬ世界に、常に猪突するのが人間だからである。不斷の冒険、一寸先も分らぬ世界への不斷の行進、そこに、人間に本質的にからみつき、宿命的にまつはりついてゐる恐怖と不安とがある。あすの命がどうなるか、病氣でもしはしないか、仕事が失敗に歸しはしないか、誠になりはしないか、子供が不良になりはしないか、さういふ不安が常に蛇の如くからみついて離れないのである。

この不安、この恐怖、これが人間の力を半減せしめる、宿命的な魔物であると思ふ。これが常に人間をすくませ、常に人間の能力を束縛し、十の力を三四しか出させない秘密な力であると思ふ。人間がもし、この魔物の力、秘密の力から自由になり得れば、驚くべき能力が発現するに相違ない。眞の勇者、眞に神を信じ得る人は、この力を恐れないのである。不安や恐怖が無いのである。故

に彼等は通常人の爲し得ないことを爲し得る。吾々が眞に偉大な仕事を爲さうとするには如何にしたらよいかといふ秘密は、この點をよく考へることによつて覺り得られると思ふ。

恐れるな、遲疑するな、斷じて爲せ、朗かな五月の空の様な心をもつて、口笛を吹きつゝ進め。曠野を行く戦車、願はくはそれでありたい。

□

人の一生は重荷を負うて遠き道をゆくが如し。急ぐべからず……

徳川家康の遺訓といふものを知らぬ人はあるまい。そしてそれが偉大な眞理をもつてゐるものだと思はぬものはあるまい。

しかし、よく考へて見給へ。家康といふ男の人間の低さに愛想の盡きる人はひとり私のみでは無からう。この遺訓は一言すれば「どうしたらうまく世が渡れるか」のをしへ以外に一步も出てゐないのだ。處世訓ではあるが、人間の本當の心構については一言も及んでゐないのである。かういふ男が、えて世間的には成功するものである。が、眞に永久に人を動かすが如きことは全くできないのである。

「敬天愛人」西郷の言葉はその點において、全く類を異にする。それは、人間の本當の心構にちかに觸れてゐるのだ。

成敗は問はぬ。たゞ本當の生き方をしよう。

□
めちやくちやに濫讀をした人にも、本當の書物の讀み方が體得される、初から經濟的に、損の無い讀み方をしようなど、心がける人は、方法的にも最も貧弱な讀書人となるに過ぎない。小林秀雄氏はかういふ意味のことを言つてゐる。

めちやくちやに、がむしやりに、勉強する人のみが本當の勉強方法をつかみ得る。最も効果ある研究法などのみを搜し求めてゐる人は、最も憐れむべき方法をつかみ得るに過ぎない。

抑へても抑へても抑へきれない、火山の爆發しようとするときの様な力と實行、それがすべてである。よき方法は、從順なる臣下のやうにその後に従ふ。

□
健康に對する注意を、私の計畫の中に、もつと眞劍に、もつと徹底的に編みこまなかつたことは、

少なくとも私に十年の損失を與へた。

□
榮養をとれ、陽にあたれ、運動をせよ、たゞこの三つを、根氣よく實行すればよかつたのだ。私は肋膜炎をした。神經衰弱になつた。それを自分の體質が悪いからの様にばかり考へてゐた。體質では無い。生活が悪かつたのだ。

□
一年はおろか、一時でも一分でも一秒でも早く合格したい、これが私の正直な念願であつた。自分のすべての、名譽も、地位も、結婚も、孝行も、何もかもがその後のみ來る様な氣がした。そして急いだ。氣狂じみて走りつゞけた。

私はこの事實に感謝と怨嗟とのいづれを捧ぐべきかを知らない。凡そ、後からの批判はいか様にも爲し得る。事實は事實のまゝにあらしめよ。渴した者が水に走るのは必然だ。ゆつくり行けといふのは、この必然を知らぬものだ。

禮拜、祈り、この二つの無いところに眞剣な生活は無い。そして眞剣な生活の無いところに本當の仕事は無い。私はかく強く信じる。

しかし。若い日の私に、眞の意味の禮拜や祈りがあつたか否かは疑問である。たゞそれに近いものとして、父母に對する強い感謝と報恩との念があつた。自分の全存在を捧げても私は父母の爲になら厭はぬまごころがあつた。故郷の家にいます老いた父母、それを思ふ時、いかに疲れてゐても私は敢然と立ち上り、いかなる苦難に對しても笑つて立ちむかつた。

再び言ふ。禮拜と祈りと無いところに眞剣な生活はなく、眞剣な生活のないところに本當の仕事は無いと。

□

小唄勝太郎は私の同郷の歌妓である。彼女の父は日露の役に戦死したのであるが、その時彼女はまだ母の胎内にあつた。父が戦地から送つて來た名は、男なら勝太郎、女なら勝といふのであつた。だから彼女の本名は勝であり、郷里では「おかつつあ」と呼ばれてゐた。

彼女の見ぬ父に對する思慕の心は極めて強く、東京で歌妓として立つことゝなつた時、その名も

勝太郎と名乗り、必死の覺悟で立ち上つたのであつた。彼女は吹込や演奏の時、必ず佛壇の父にむかつて之を告げ、愈々實演する時には父を念するのである。

彼女の好んで歌ふ鴨綠江ぶしに

アカシヤの梢をもるゝ月影に

結ぶ露營の夢さめて

いなゝく駒に鞭をあて

來る日もまた滿洲の雪の上

といふのがある。彼女はこの歌の中に亡父を描き、涙にぬれた心で歌ふのに相違ない。

一歌妓の歌ひ上げる唄、その中にも父に對するまごころがある。あの嫺々たる哀韻の中に、私はいつもこのまごころを感じて、そゞろに彼女の心を憐れむのである。

□

獨學者は必ず哲學が無ければならぬ、そして深い強い精神生活を有たなければならぬ。學校に學ぶ者は、他から勵まして貰へるが、獨學者は自分で勵まし鞭うたねばならぬからだ。

これは私が若い日に抱いてゐた考であつたが、今でもその考に變りは無い。獨學者は、その専攻科目の何であるを問はず、必ず一つの思索、一つの精神生活を有たねばならぬ。その無い學究生活は、油のきれた齒輪の様なものであり、水の涸れた井戸の様なものである。忽ちにして活動はとまり、忽ちにして底が露はれるであらう。

私の永い受験生活の體驗は、頭で戦ふのでなくて精神で戦ふのだといふ信念を益々強めさせてくれた。日本兵を見る。武器ではない。體力ではない。たゞ一つの精神だ。

獨學者は必ず哲學が無くてはならぬ。精神生活が無くてはならぬ。

□

文檢雜誌と参考書以外に何も讀まないやうな人は、たとひその人が體操の檢定を受ける人であつても、私はその人を憐れみ且輕蔑せずにはゐられない。さういふ人は年齢はいかに若くても、髪や皮膚はいかに光澤があつても、心は老いすさんでゐるからである。さういふ人に眞の感激は無く、眞のたゞかひは無く、眞の生活は無い。

「キユリー夫人傳」を讀んだ時の清純無比の感激、ポアンカレの「科學者と詩人」を讀んだ時の胸

の高鳴り、チエホフの「伯父ワーニヤ」讀後の心の深まり、アルベルト・シュヴァイツェルの「我生活と思想より」讀後の強い感激、それは黄金では買へない心の糧であり、感激の源であつた。

若人よ、よき本を讀みたまへ。よき映畫を見たまへ。諸君の心の血は、それによつてのみ清められ、それによつてのみ高められる。

永遠に若さを保ち得る人のみ、眞に偉大なる事をなし得る。

昭和十四年五月十五日印刷
昭和十四年五月十九日發行

著き檢定學徒の手記

正價金壹圓八拾錢

著作者 大月 靜 夫

發行者 阪 本 眞 三
東京市神田一ツ橋二丁目三番地

印刷者 寺井藤左工門
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 大日本印刷株式會社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

不許
複製



發行所

東京市神田一ツ橋二丁目三番地
振替貯金口座東京八七貳番

大同館書店

◇松田友吉氏著——(倫理學研究の入門書・倫理學の概論)——

最新刊
文檢
參考
系統的倫理學

◇四六判最上製美本紙數五百餘頁 正價金貳圓六拾錢 送料十四錢◇

【本書の特色】
 (一)初學者の爲の入門書として其項目は普通の倫理學の様式に従つた(二)各種の述語にも接する様にした。(三)然れども新倫理思想の導入、日本精神と倫理思想、東洋西洋の倫理史、倫理思想の批判等をも容れて説いた。(四)全篇を通じて倫理學體系構成の上に倫理的識見の養成を主とし更に倫理學專攻の士には其第一階梯たらしめ、道徳教育に従ふ者の爲めには其根柢たらしめんとした。(五)各章節の終に附記した問題は文檢近年のものである。されば文檢受験者の爲めにも参考資料となる許りでなく高文・帝大の應試の爲めにも、はたまた道徳修身教育者等の爲めにも参考資料とならん事を切望する。

松田友吉著 ●最新國民道徳概論 四六判最上製五百餘頁 正價金貳圓八拾錢 送料十四錢

渡部政盛著 ●最新西洋教育史講義(好評) 正價金四圓八拾錢 送料十四錢

笠井義夫著 ●本邦教育思潮概説 四六判最上製三百五十頁 正價金壹圓五拾錢 送料十錢

三ノ貳橋ツ一((行發館同大))區田神市京東

〔大同館出版〕**教育參考書總目錄**

- 早稻田大學教授 稻毛詛風著 ●教育哲學の研究(好評) 金四圓五拾錢 送料廿二錢
- 早稻田大學教授 稻毛詛風著 ●教育者のための哲學(拾七版) 金貳圓五拾錢 送料十四錢
- 早稻田大學教授 稻毛詛風著 ●歐洲文化の印象と批判(好評) 金三圓八拾錢 送料十四錢
- 文學博士 紀平正美著 ●自論(貳拾版) 金貳圓三拾錢 送料十四錢
- 文學博士 紀平正美著 ●改訂人格の力(拾貳版) 金壹圓八拾錢 送料十四錢
- 松田友吉著 ●最新國民道徳概論(再版) 金貳圓八拾錢 送料十四錢
- 松田友吉著 ●現代教育新思潮の認識と批判(最新刊) 金三圓八拾錢 送料廿三錢
- 松田友吉著 ●文部檢定 現今の教育學解義(最新刊) 金貳圓八拾錢 送料十四錢
- 渡部政盛著 ●集說 教育學概論(七版) 金五圓八拾錢 送料廿二錢
- 渡部政盛著 ●現 日本教育學說と其批判(六版) 金三圓八拾錢 送料廿錢
- 渡部政盛著 ●最新西洋教育史講義(最新刊) 金四圓八拾錢 送料廿二錢
- 末廣時彥著 ●最新心理學概論(最新刊) 金三圓八拾錢 送料廿二錢

座口金貯替振 番貳七八京東 行發館同大 區田神市京東 三ノ貳橋ツ一

大阪高等學校校長 金子幹太著	● ジョンストン倫理學序論(再版)	金貳圓五拾錢 送料十四錢
松江高等學校教授 高橋敬視著	● 獨逸ニコライハルトマン著倫理學綱要(新刊)	金四圓八拾錢 送料廿錢
松江高等學校教授 高橋敬視著	● 西洋哲學史講義(四版)	金三圓八拾錢 送料廿錢
市川一郎著	● 哲學一班(基礎概念)講義(好評)	金五圓八拾錢 送料廿二錢
文學博士 宇野哲人著	● 訂支那哲學史講話(五拾版)	金貳圓八拾錢 送料廿二錢
文學博士 宇野哲人著	● 增補支那哲學の研究(拾四版)	金三圓八拾錢 送料廿二錢
笠井義夫著	● 本邦教育思潮概說(最新刊)	金壹圓五拾錢 送料十錢
松田友吉著	● 文檢參考西洋倫理史要(三版)	正價金貳圓 送料十四錢
松田友吉著	● 文檢參考東洋倫理史要(再版)	正價金貳圓 送料十四錢
松田友吉著	● 文檢參考日本倫理史要(三版)	正價金貳圓 送料十四錢
大關増次郎著	● 教育學概論(好評)	金三圓五拾錢 送料十四錢
長田新博士校閱 津田萬夫著	● 教育の基礎たる哲學(貳拾版)	金壹圓參拾錢 送料十錢
吉田熊次序 市川一郎著	● 教育の基礎たる社會學(三版)	正價金貳圓 送料十四錢
市川一郎著	● 教育の基礎たる社會學(三版)	正價金貳圓 送料十四錢

東市神田區 大館發行 振替貯金口座 東京八七番

市川一郎著	● 最新認識論講議(三版)	金壹圓貳拾錢 送料十錢
松田友吉著	● 最新文檢修身科受驗法(七版)	金三圓三拾錢 送料十四錢
下地惠常著	● 中等教員文檢修身科精講(最新刊)	金貳圓五拾錢 送料十四錢
文學博士 宇野哲人著	● 四書講義大	金貳圓三拾錢 送料十四錢
文學博士 宇野哲人著	● 四書講義中	金貳圓八拾錢 送料十四錢
教育學術會著	● 文檢論語解義(六版)	金貳圓八拾錢 送料十四錢
教育學術會著	● 文檢孟子解義(新刊)	金三圓五拾錢 送料十四錢
教育學術會著	● 文檢四書研究(拾版)	正價金貳圓 送料十錢
三浦藤作著	● 國民道德要領講義(三版)	金貳圓八拾錢 送料十四錢
三浦藤作著	● 教育大意講義(附(教育史)(三版)	金貳圓五拾錢 送料十四錢
教育學術會著	● 文檢國民道德要領問題解答(六版)	金貳圓三拾錢 送料十四錢
渡部政盛著	● 最新哲學辭典(八版)	金四圓八拾錢 送料廿二錢
渡部政盛著	● 最新教育辭典(最新刊)	金六圓八拾錢 送料廿二錢
守屋貫秀著	● 最新教育辭典(最新刊)	金六圓八拾錢 送料廿二錢
渡部政盛著	● 現今改造的教育思潮批判(拾三版)	金貳圓五拾錢 送料十四錢

東市神田區 大館發行 振替貯金口座 東京八七番

教育學術會著	●文檢教育科研究者の爲に(再版)	金壹圓八拾錢 送料十四錢
松田友吉著	●最新文檢教育科受驗法(最新刊)	金壹圓貳拾錢 送料十錢
松田友吉著	●文檢教育科問題解答(三版)	金貳圓八拾錢 送料廿二錢
渡部政盛著	●集說教育概論(七版)	金五圓八拾錢 送料廿二錢
松田友吉著	●文部檢定現今の教育學解義(最新刊)	金貳圓八拾錢 送料廿四錢
渡部政盛著	●文部檢定現今の教育學講義(四版)	金三圓八拾錢 送料廿二錢
同	●文部檢定現今の教育學講義(再版)	金三圓五拾錢 送料廿二錢
同	●文部檢定現今の教育學講義(四版)	金四圓八拾錢 送料廿二錢
同	●文部檢定現今の教育學講義(好評)	正價金五圓 送料廿二錢
同	●文部檢定現今の教育學講義(好評)	正價金五圓 送料廿二錢
同	●文部檢定現今の教育學講義(好評)	正價金五圓 送料廿二錢
同	●文部檢定現今の教育學講義(好評)	正價金五圓 送料廿二錢
甲斐一二著	●文部檢定現今の教育學講義(好評)	正價金貳圓 送料十四錢
富田義雄著	●文檢修身科委員の思想研究(最新刊)	正價金貳圓 送料十四錢
渡部政盛著	●文檢日本東洋西洋教育史(八版)	金六圓八拾錢 送料廿二錢
甲斐一二著	●修身教育主要學說辭典(好評)	特價金貳圓 送料十四錢

東京市神田區 大館發行 振替貯金口座 東京七八番

明治教育社編	●文部檢定現今の教育學講義(四拾五版)	金貳圓五拾錢 送料十四錢
明治教育社編	●文部檢定現今の教育學講義(廿五版)	金貳圓五拾錢 送料十四錢
教育學術會著	●文部檢定現今の教育學講義(廿五版)	正價金貳圓 送料十四錢
教育學術會著	●國民精神作興詔書解義(新刊)	正價金貳圓 送料十四錢
打富司著	●文部檢定現今の教育學講義(最新刊)	正價金貳圓 送料十四錢
大森松次郎著	●文部檢定現今の教育學講義(三版)	正價金貳圓 送料十四錢
大森松次郎著	●青年と公民知識(再版)	金貳圓五拾錢 送料十四錢
吉本俊二著	●文部檢定現今の教育學講義(好評)	金四圓八拾錢 送料廿二錢
栗田喜代二著	●文部檢定現今の教育學講義(新刊)	金壹圓貳拾錢 送料十錢
松田友吉著	●初等教育新職業指導と進學輔導法(最新刊)	正價金貳圓 送料十四錢
東宮七男著	●農村小學校の職業指導(新刊)	金壹圓貳拾錢 送料十錢
中井賢藏著	●自力本願に立脚した農村の建替へ(新刊)	金壹圓貳拾錢 送料十錢
鈴木忠康著	●誰にでも遺傳と進化(第貳版)	金壹圓四拾錢 送料十四錢
關露香著	●誰にでも生物進化論(第貳版)	金貳圓八拾錢 送料十四錢

東京市神田區 大館發行 振替貯金口座 東京七八番

松田友吉著 ● 兒童生活の教育心理學 (最新刊) 金貳圓四拾錢 送料十四錢	松田友吉著 ● 各科の學習心理 (最新刊) 正價金貳圓 送料十四錢	松田友吉著 ● 生活指導の實踐教育 (最新刊) 金貳圓五拾錢 送料十四錢	醫學博士 羽太銳治著 ● 性慾教育の研究 (拾三版) 正價金參圓 送料十四錢	島田正藏著 ● 體 育 原 論 (好評) 金三圓八拾錢 送料十錢	大阪朝日新聞記者 山名正太郎著 ● 最新 新聞記事教材研究 (好評) 金壹圓貳拾錢 送料十四錢	大久保 龍著 ● 曲 人としてのベスタロツチ (三版) 金貳圓八拾錢 送料十四錢	小關貞次著 ● ベスタロツチ全集 (六版) 金貳圓五拾錢 送料十四錢	甲斐一二著 ● 兒童心理學綱要 (再版) 金壹圓八拾錢 送料十四錢	早稻田大學教授 原田 實著 ● エレンケイ 女史原著 兒童の世紀 (七版) 金貳圓五拾錢 送料十四錢	笠井義夫著 ● 本邦教育思潮概說 (好評) 金壹圓五拾錢 送料十四錢	大久保 龍著 ● 德川光圀と水戸學 (最新刊) 金壹圓八拾錢 送料十四錢	大久保 龍著 ● 教育者の明治天皇御製謹解 (最新刊) 正價金壹圓 送料十四錢	小倉喜市著 ● 本居宣長の人及思想 (最新刊) 金壹圓八拾錢 送料十四錢
---------------------------------------	-----------------------------------	--------------------------------------	--	----------------------------------	---	--	------------------------------------	-----------------------------------	--	------------------------------------	--------------------------------------	---	--------------------------------------

東京市神田區 大 同 館 發 行 振替貯金口座 東京八七番

早稻田大學教授 稻毛詛風著 ● 哲學教科書 (哲學概論) (再版) 金三圓八拾錢 送料廿二錢	早稻田大學 稻毛詛風著 ● 改訂 オイケンの哲學 (拾三版) 金壹圓六拾錢 送料十二錢	大關増次郎著 ● カントの哲學の批判 (五版) 正價金貳圓 送料十二錢	大關増次郎著 ● カ ン ト 研 究 (三版) 金七圓八拾錢 送料廿四錢	市川一郎譯 ● 哲學一班 (基礎概念) 講義 (好評) 金五圓八拾錢 送料廿二錢	中澤美治著 ● 活 動 寫 真 と 教 育 (好評) 正價金貳圓 送料十四錢	根本通夫著 ● 文檢受驗用及 鍊士昇段參考 劍 道 要 義 (最新刊) 金貳圓五拾錢 送料十四錢	新井順一郎著 ● 現 代 を 基調とせる 高 二 の 國 史 教授 (四版) 金四圓八拾錢 送料廿二錢	新井順一郎著 ● 現 代 を 基調とせる 尋 五 の 國 史 教授 (最新刊) 金貳圓八拾錢 送料十四錢	栗山周一著 ● 新 小學國史の勉強 (尋五學年卷) (最新刊) 正價金貳圓 送料十四錢	栗山周一著 ● 新 小學國史の勉強 (尋六學年卷) (最新刊) 印刷中近刊	栗山周一著 ● 新 小學地理の勉強 (尋五學年卷) (最新刊) 金貳圓五拾錢 送料十四錢	栗山周一著 ● 新 小學地理の勉強 (尋六學年卷) (最新刊) 金貳圓五拾錢 送料十四錢	栗山周一著 ● 新 小學地理の勉強 (外國の部) (最新刊) 金壹圓八拾錢 送料十四錢
--	---	-------------------------------------	--------------------------------------	--	--	--	---	--	---	---------------------------------------	--	--	---

東京市神田區 大 同 館 發 行 振替貯金口座 東京八七番

新井順一郎著	● 國語生活・國語教育 (最新刊)	金壹圓八拾錢 送料十四錢
小堺宇市著	● 前途ある教育者の爲に (三版)	正價金貳圓 送料十四錢
馬城 麓著	● 教育者秘帖 (最新刊)	金壹圓五拾錢 送料十四錢
島 爲男著	● ベルクソン哲學と現代教育 (新刊)	正價金貳圓 送料十四錢
野村隈畔著	● ベルクソンと現代思潮 (八版)	正價金貳圓 送料十四錢
早稻田大學教授 原田 實著	● 新教育のサンダアスの生涯 (好評)	金壹圓八拾錢 送料十四錢
近藤壽夫著	● 現代の史觀と國史教育 (再版)	正價金貳圓 送料十四錢
新井順一郎著	● 國史及び史育隨想 山鳩は呼ぶ (最新刊)	金壹圓八拾錢 送料十四錢
櫻井祐男著	● 生を教育に求めて (五版)	金貳圓八拾錢 送料十四錢
稻毛詛風著	● 青年教師の歩める道 (十二版)	正價金貳圓 送料十四錢
松木幹雄著	● 若き中等教師と其周圍 (好評)	金壹圓八拾錢 送料十四錢
文學士 青葉學人著	● 帝國大學(正系)入學受験法 (最新刊)	金貳圓五拾錢 送料十四錢
阿達義雄著	● 帝大傍系入學受験提要 (最新刊)	金壹圓貳拾錢 送料十錢
大月靜夫著	● 若き檢定學徒の手記 (三版)	金壹圓八拾錢 送料十四錢

東京市神田區 大 同 館 發 行 振替貯金口座
 一ツ橋二ノ三

389
359

